

A. 研究目的

近年都市部でホームレス者は急増しているのは周知の事実であり、大阪府における野宿生活者の実態は様々な調査研究により、おおむね把握されている。一方、ホームレス死亡者の実態はほとんど把握できていない。これらのほとんどが異状死体として、警察に届け出られるが、その実数は不明である。大阪府の2000年から2004年までのホームレス死亡者の実態について調査を行った。

B. 研究方法

1. 調査の概要

大阪府における異状死体(2000年から2004年の5年間、合計50,419名のなかから、抽出することのできた、ホームレス者死亡1,052名において調査を行った。大阪府監察医事務所および大阪府警察本部刑事部の協力を得て行った。

ホームレス死亡者の生活と死亡の実態について、得られた情報をもとにして、データベースを構築し、分析を行った。

異状死体として警察へ届け出られると、まず、事件性の有無を警察が判断した上で、事件の可能性がある場合は、大学の法医学講座で司法解剖が行われる。

事件の可能性がない場合は、大阪市内と大阪市外で対応が違う。大阪市外では、ほとんどの場合、警察医が、死体を検案しただけで死因を決定し、解剖となることは少ない。ただし、警察の方で、事件とは関わりはないが、どうしても死因を決定した方がいいと判断した場合は、死亡者の親族から解剖の承諾を得た上で、大学の法医学講座で承諾解剖が行われる。大阪市内では、大阪府監察医事務所の監察医が死体検案・

解剖を行う。大阪府監察医事務所は、死体解剖保存法第8条の規定に基づき、大阪市内における死亡のうち、異状死体として警察へ届出のあった死体を検案・解剖を行い、その死因を決定する機関であり、そこで行う解剖を行政解剖という。

2004年の大阪府の異状死体数は10,481名あった。内訳は、大阪市内が39%、大阪市外が61%で、司法解剖は1,005件、監察医解剖(行政解剖)は1021件、承諾解剖は50件前後で、残り、8,400件は死体検案だけで死因が決定されている。大阪府における全死亡者数は2003年で64,405名であり、全死亡者の16.2%が異状死として届け出られているという現状である。

異状死体として届け出られたホームレス死亡者については、抽出する条件を定義する必要があり、二つのグループとして定義する。

ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法第2条で、ホームレスは、都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所として日常生活を営んでいる者と定義されているが、今回は、これを野宿生活者とし、

路上や公園、河川敷などにテントやダンボールなどで野宿生活する現場を確認できているか、発見時状況から野宿生活をしていると推測されるものを野宿生活者とした。つぎに、野宿予備集団として簡易宿舎投宿中の人たちを簡宿投宿者として定義し、ホームレス死亡者を野宿生活者と簡宿投宿者の両者とし、これらを分析対象とした。

ホームレス者の定義については、国際的には、占有できる住居をもっていない状態にあり、不安定な居住を余儀なくされている人々としており、シェルターなどの保護

施設で一時的宿泊施設で生活している人々を含んでいるが、今回のホームレス死亡者としてはこれらを含んでいない。

調査した項目は、年齢、性別、死因、発見された地域、死亡原因、生活拠点、死亡場所、病院への搬送の有無、解剖による死因の決定の有無などである。これらをコンピューター (Windows Xp)、Microsoft Excel2002 を使用してデータ入力を行い、データベース化した上で統計処理を行った。統計ソフトは、SPSS 社 SPSS Base 11.5J, SPSS Regression Models 9.0J を使用した。

C. 結果

1. ホームレス死亡者の概略

調査対象者は、2000 年から 2004 年の 5 年間の大阪府全体におけるホームレス死亡者計 1,052 名(男性 1,026 名、女性 26 名)であった。大阪市内が 874 名、大阪市外が 178 名であった。年次別には、2000 年 256 名(うち女性 7 名)、2001 年 233 名(うち女性 6 名)、2002 年 182 名(うち女性 7 名)、2003 年 229 名(うち女性 6 名)、2004 年 152 名(うち女性 0 名)と減少傾向がみられるが、年ごとのばらつき自体相当大きい(表 1)。

ホームレス死亡者は、野宿生活者 769 名(うち女性 17 名)と簡宿投宿者が 283 名(うち女性 9 名)に分けられる。平均年齢は 57.8 ± 8.9 歳と 50 歳代、60 歳代を中心に、26 歳から 87 歳まで幅広くみられた。女性の平均年齢は、57.6 歳 ± 11.9 歳で 26 歳から 75 歳の分布で、平均年齢は男性の 57.8 ± 8.8 歳とほとんど変わらない。

年齢層は、野宿生活者と簡宿投宿者で差はなく、平均年齢は、それぞれ 57.6 ± 8.4 歳、58.4 ± 10.1 歳で、年次別の平均年齢に特に偏りや傾向はみられなかった。大阪市

外には簡宿投宿者の死亡例はなく、大阪市内の野宿生活者の平均年齢は、56.8 ± 8.4 歳、大阪市内の野宿生活者の平均年齢は、57.8 ± 8.4 歳とほとんど差はみられなかった(表 2)。

2. 死亡の背景

発見された場所は圧倒的に西成区が多く、野宿生活者 160 名、簡宿投宿者が 276 名の 436 名がいた。簡宿投宿者のすべてが大阪市内で、そのほとんどが西成区に集中し、次に多かったのは浪速区 4 名であった。野宿生活者については、西成区 160 名に次いで、浪速区 77 名、北区 71 名、中央区で 71 名、天王寺区 33 名、住之江区 26 名、都島区 23 名と続いた。大阪市内外では、堺市 24 名、枚方市 18 名、豊中市 16 名、守口市 14 名、東大阪市 14 名、八尾市 11 名、泉大津市 10 名と続いた。

年次別の地域分布は、大阪市内外では、ほぼ横ばい傾向にある。各都市ごとの年度間の増減については総数が少なく、一定の傾向を見いだすことはできなかった。一方、大阪市内においては、簡宿投宿者の死亡数は年々徐々に減少し、野宿生活者の死亡数も同様であった。とりわけ、西成区においては、野宿生活者、簡宿投宿者とも減少の一途をたどり、2000 年から 2004 年の 5 年間でほぼ半減していた (表 3)。

月別発生数では、全体では 1 月をピークとして 1 月から 3 月に多く、8 月から 10 月が少ない。野宿生活者でも簡宿投宿者でもその傾向は変わらない(表 4)。

病死に関しては、いずれも 1 月をピークとして冬に多く、8 月から 10 月が少なく、特に 8 月で一番少なかった。

発見場所は、簡宿投宿者 283 名のうち、

250名(88.3%)は簡易宿舎内であり、自室が233名、共同トイレ9名で、ほかには、屋上、階段、炊事場、風呂、洗面所などであった。簡易宿舎以外では、簡宿周囲の路上が24名(8.5%)あったが、いずれも簡宿内の高所からの飛び降り、もしくは転落であった。そのほかは、銭湯、病院内・警察署内のトイレ、駐車場、公園、知人宅などであった。

野宿生活者の発見場所は、路上や公園、河川敷の順に多い。大阪市内では、路上314名(53.1%)と圧倒的に多い。これらは、高架下とか、軒下など雨風をしのぐ場所での生活や、路上での、廃車、リヤカー、テントでの居住が含まれる。以下、公園131名(22.2%)、河川敷50名(8.5%)、駅16名(2.7%)、川などの水中、駐車場各11名(1.9%)、マンション8名、空き地・愛隣センター各7名と続く。大阪市外では、路上53名(29.8%)、公園46名(25.8%)、河川敷42名(23.6%)の順であるが、大差はない。駅9名(5.1%)、川などの水中6名、店舗5名、山の中4名と続く。その大半は、生活拠点と一致している。

異状が発見され、医療機関に救急搬送されたのは、19.4%(204名)であった。大阪市内に限定された簡宿投宿者では11.3%(32名)が病院へ救急搬送された。一方、野宿生活者では、22.4%(172名)が病院へ搬送された。大阪市内と市外での搬送率を比べると、大阪市内では24.4%(144名)と、大阪市外の15.7%(28名)と比べはるかに高い。その要因は、発見場所に依存する部分が大きく、大阪市内の発見場所ごとの、救急搬送率は、路上が31.5%(99名)と一番高く、駐車場18.2%(11名)、公園15.3%(20名)、駅31.3%(5名)、河川敷10%(5名)の順であり、人通

りの多いところほど、救急搬送率が高い。大阪市外では、路上が34%(18名)、駅22.2%(2名)と高いが、河川敷7.1%(3名)、公園6.5%(3名)と、ほとんど搬送されていない。公園や河川敷での人通りの少なさなどが影響しているように思われる。年次別の救急搬送率は、この5年間に徐々に上昇しており、2000年では19.9%だったのが、2004年では21.7%まで上昇しており、簡宿投宿者では急増している(表5)。

野宿生活者の生活拠点は、発見場所と同じく、路上、公園、河川敷などである。大阪市内では、路上が58%(343名)と圧倒的に多い。これらは、高架下とか、軒下など雨風をしのぐ場所での生活を含んでいる。以下、公園23.2%(137名)、河川敷8.6%(51名)、駅2.5%(15名)と続く。

大阪市外では、公園が25.8%(46名)と一番多く、路上および河川敷がともに24.7%(44名)、駅5.6%(10名)、駐車場1.4%(8名)、愛隣センター軒下0.8%(5名)と続く。それ以外には空き地、地下街、ビル、寺・神社、空き倉庫、空き家などであった。

大阪市内では、すみかが判明したものとしては、テント19.5%(115名)、高架下4.7%(28名)、放置車両4.4%(26名)、ダンボール4.2%(25名)、リヤカー2.5%(15名)、掘っ立て小屋2.4%(14名)、軒下2.2%(13名)、ベンチ、橋の下、植え込み、ふとん各1.5%(9名)、ダンボール小屋1.4%(8名)と続いた。そのほか、階段下、毛布、愛隣センター軒下、歩道橋下などと多彩であった。大阪市外では、すみかが判明したものとしては、テント19.1%(34名)、橋の下9.0%(16名)、放置車両6.7%(12名)、ベンチ6.2%(11名)、掘っ立て小屋5.1%(9名)、高架下4.5%(8名)、軒下、空き家各2.2%(4名)、

ダンボール 1.7%(3名)と続いた。それ以外には、リヤカー、植え込み、ふとん、寝袋、毛布、ゴミ置き場、空き倉庫などがあった。

3. 解剖と死因

解剖となるシステムが大阪市内と大阪市内外では異なり、その結果、全体で46.9%が解剖となっているが、野宿生活者では、大阪市内 60.3%の解剖率と比べ、大阪市内 19.73%とかなり差が見られる。簡宿投宿者では36.0%の解剖率であった。

発見時、死後変化が高度のため死因の決定ができなかったものが3.5%(37名)あった。野宿生活者では、大阪市内は3.0%(18名)で、大阪市内の方が6.2%(11名)と多く、市外では発見されにくい状況があった。高度腐敗が9名、白骨が14名、ミイラ化が6名であった。一方、簡宿投宿者では、2.8%(8名)にすぎず、すべて高度腐敗であった。

死亡の種類は、病死が69.3%と大半を占め、自殺11.6%、他殺2.9%、自己過失(不慮の事故)10.2%、不詳の外因死4.1%、不詳1.9%であった。野宿生活者については、死亡の種類分布は、大阪市内と大阪市内外では、ほとんど差はなく、病死が69.1%、自殺7.0%、他殺3.8%、自己過失(不慮の事故)12.6%、不詳の外因死4.9%、不詳2.6%であった。簡宿投宿者では、自殺が24%と飛び抜けて高く、病死70%、自己過失3.5%、不詳の外因死1.8%、他殺が0.7%であった。なかでも、特徴的なのは、凍死7.2%(76名)、飢餓死3.6%(38名)がみられたことであった。ともに野宿生活者に多く、凍死では、9.5%(73名)、飢餓死では4.4%(34名)であった(表6,7,8)。

年次別の死亡の種類を調べたところ、簡宿投宿者では、この5年間に自殺の比率が

漸増し、2000年では21.1%であったのが、2004年では34.2%にまで上昇している。一方、野宿生活者においては、大阪市内、大阪市内外とも年ごとのばらつきが大きく、増加とも減少ともいえない。しかしながら、簡宿投宿者が大阪市内西成区に集中することに注目して、西成区だけを見てみると、簡宿投宿者では、年ごとに自殺率が増加しているというまでもないが、野宿生活者においても、自殺率が増加しており、2000年では2.4%であったのが、2004年には10.5%にまで増加した。このことは、西成区でのホームレス生活自体が自殺の傾向を高めていると考えられる。自殺だけでなく他殺も増えており、2000年では0%だったのが、2004年では10.5%にまで上昇している。このことは、西成におけるさまざまなストレス要因の増加が影響を与えた可能性がある。

D. 考察

近年、深刻な経済不況が続いた影響か、野宿生活を余儀なくされる人々が全国的に急増し、2003年1月の厚生労働省の調査では25,296名を数えるといい、中でも、大阪府には7,757名、そのうち大阪市内には6,603名いるとされ、大阪は、日本一ホームレスが多い都道府県でもあり、政令指定都市でもある。しかしながら、ホームレス死亡者数については、ほとんど調査されておらず、唯一、逢坂らによる2000年の大阪市のホームレス死亡者の調査が行われているだけである。今回は、調査方法をある程度簡略化し、データベースから漏れなく抽出する方法をとることにより、2000年から2004年までの5年間における、大阪府の野宿生活者・簡宿投宿者の死亡例について検討した。簡宿投宿者をホームレス死亡者に含めたの

は、明らかに野宿生活者予備軍であることを考慮した。シェルターなどの施設で死亡した人々は含まれないし、体調不良などで入院後の死亡例で主治医が死因を決定したのものについては、異状死体ではないので今回の統計には含まれない。

今回の調査では、大阪市内と大阪市外、野宿生活者と簡宿投宿者に分けて検討した。女性は2.5%(26名)にすぎず、しかも2004年はゼロであった。平均年齢は、 57.8 ± 8.9 歳で、いずれの群も年齢差はわずかであり、年齢分布で有意差はなかった。2003年の全国調査でのホームレス生活者の平均年齢は55.9歳であり、平均年齢に大差なく、1.9歳低いだけにとどまる。

2000年から2004年までの5年間にホームレスが1052名死亡しているが、2003年1月に大阪府内で生活するホームレスが7,757名いて、それと比較すると、5年間に少なくとも13.6%が死亡していることになる。異状死体におけるホームレスの割合は、大阪市内では4.4%もあり、確実に日本一の比率であると思われる。なお、大阪市外では、0.6%で、大阪府全体で2.1%と決して少なくない。

野宿生活者死亡例、簡宿投宿者死亡例とも、釜ヶ崎を有する、大阪市内西成区で圧倒的に多く、それぞれ大阪市内の27.1%、97.5%を占める。この地域は、古くは江戸時代からの歴史があり、木賃宿、ドヤ、簡易宿泊所と名称を変えながらも、安宿の形態を保つ宿が集中しており、労働斡旋、炊き出し、生活保護認定など、野宿生活者が生活しやすい環境が築かれている。その結果、大阪市内に野宿生活者が集中するだけでなく、大阪府にも野宿生活者が集中し、結果として、大阪府の野宿生活者が日本一

多いという結果になっている。

ホームレスの増加という社会問題に対して、2002年にホームレスの自立の支援等に関する特別措置法が施行されるなど、最近では、野宿生活者を支援して少しでも減らす努力が行われてきたようである。その結果、西成区では、野宿生活者の死亡数がほぼ5年間に半減し、簡宿投宿者の死亡数も同様に半減してきた。このことは、簡宿投宿者が野宿生活者の予備軍であることを示唆しており、特に路上生活者である程度の収入が得られたとか、体調の悪い人などが、すみかとして簡易宿泊所を使用していることを示しているように思われる。しかしながら、野宿生活者は依然として多く、課題は多い。

大阪市内においては、おおむね野宿生活者の死亡数は半減しつつあるが、大阪市外については、ほとんど野宿生活者の死亡者の減少はなく、対策は進んでいないようである。

この5年間で、ホームレス者が救急車で病院へ搬送されることはより増えているようである。今回は、死亡例からしか検討できなかったが、19.9%程度の搬送率が徐々に増え、21.7%となっている。このことは、年々、急病や外傷などにより急変した人々が早期発見され、病院へ搬送されていることを示している。まわりの人々による目配りがよくできた環境が整いつつあるのではないか。ホームレス死亡者が減少してきたのは、単にホームレス者が減少しただけではなく、病気などで体調が悪いホームレスが、以前よりも十分な医療を受ける機会を得た結果なのかもしれない。

野宿生活者の健康状態が全体に芳しくないのはいうまでもないことであり、病院で

の短期間の入院を繰り返しているひとも少なくないという。死亡者の発生は、1～3月に多く、8月～10月に少ないという、内因性急死の傾向とほとんど変わらない。温度環境の影響を強く受けている。野宿生活者においては、凍死が9.5%(73名)、飢餓死が4.4%(34名)を占めており、劣悪な栄養状態や生活環境が背景にあることはいうまでもない。路上での毛布、ふとん、ダンボールだけでの生活者も実際には相当多い。また、死亡したことが誰にも気づかれることなく、腐乱死体や白骨死体で発見されることも少なくない。

一方、簡易投宿者では、自殺が24%もみられるという特徴を持つ。簡易宿泊所に投宿する野宿生活者は、雨風をしのぐために、止まれるだけのお金があるときによく利用するとされる。体調が悪いときには、その傾向が強いという。その中で、簡易宿泊所に自殺が多いことは、既往症を多く持ち体調の悪いホームレスが簡易宿泊所に宿泊し人生を悲観していたとか、自殺することを目的に簡易宿泊所に投宿したというような可能性を考える必要がある。今後、簡易宿泊所投宿者には、自殺予防のためのカウンセリングやメンタルケアが必要に思われる。

本研究のようにホームレス死亡者を詳細に調査することは、ホームレス対策が進んでいるか否かのバロメーターになるように思われる。

E. 結論

2002年にホームレスの自立の支援等に関する特別措置法が施行され、実際にホームレス死亡者は徐々に減少している。ホームレス者の死亡平均年齢は、 57.8 ± 8.9 歳と

若く、ホームレス生活者の平均年齢と比べ、2歳ほど高いだけである。大阪府で5年間にホームレス生活の13.6%が死亡していることをふまえると、対策は急務であるといえる。死因が、感染症や栄養障害、凍死、自殺などであることをふまえると、予防可能な死はかなり多く、必要な医療および衣食住の保障がされていれば、避けることの死であると考えられる。

参考文献

- 1) 逢坂隆子, 坂井芳夫, 黒田研二, 的場梁次. 大阪市におけるホームレス者の死亡調査. 日公衛誌 2003 ;50(8):686-96
- 2) 厚生労働省:ホームレスの実態に関する全国調査報告書の概要. 2003
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/03/h0326-5.html>
- 3) 大阪府立大学社会福祉学部 都市福祉研究会:大阪府野宿生活者実態調査報告書. 大阪:2002

表1 年次別の大阪府におけるホームレス死亡者の分布(2000-2004)

年	野宿(大阪市外)			簡宿(大阪市内)			野宿(大阪市内)			大阪市内全体			総計
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	
2000	30	2	32	70	1	71	149	4	153	219	5	224	256
2001	40		40	56	3	59	131	3	134	187	6	193	233
2002	31		31	49	4	53	95	3	98	144	7	151	182
2003	40		40	61	1	62	122	5	127	183	6	189	229
2004	35		35	38		38	79		79	117		117	152
総計	176	2	178	274	9	283	576	15	591	850	24	874	1052

表2 大阪府におけるホームレス死亡者の年齢分布

年齢	野宿(大阪市外)			簡宿(市内)			野宿(市内)			大阪市内全体			総計
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	
20代	1		1	2	1	3	1		1	3	1	4	5
30代	6		6	12		12	10	1	11	22	1	23	29
40代	18		18	27	1	28	78	2	80	105	3	108	126
50代	86	1	87	100	1	101	230	5	235	330	6	336	423
60代	55		55	98	5	103	201	6	207	299	11	310	365
70代	9	1	10	33	1	34	55	1	56	88	2	90	100
80代	1		1	2		2	1		1	3		3	4
総計	176	2	178	274	9	283	576	15	591	850	24	874	1052

表3 年次別の大阪府におけるホームレス死亡者の地域別分布(2000-2004)

	簡宿 西成	野宿生活者(大阪市内)							野宿生活者(大阪市外)						
		西成	浪速	中央	北	天王寺	住之江	都島	枚方	守口	堺	豊中	東大阪	八尾	泉大津
2000	70	42	20	20	21	9	5	4	2	3	4	6	3	1	1
2001	57	44	17	13	11	12	5	3	6	3	7	1	3	3	1
2002	53	27	19	11	13	2	7	2	3	1	4	4	2	3	3
2003	60	28	12	11	21	5	6	11	2	5	7	2	1	3	3
2004	36	19	9	16	5	5	3	3	5	2	2	3	5	1	2
総計	276	160	77	71	71	33	26	23	18	14	24	16	14	11	10

表4 大阪府におけるホームレス死亡者の死亡発見月別分布

		総計	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
簡宿	大阪市内	283	34	27	22	26	26	21	24	15	19	18	29	22
野宿	大阪市内	591	90	73	65	35	48	38	42	31	32	36	51	50
	大阪市外	178	21	20	17	11	20	9	10	14	12	9	13	22
	合計	769	111	93	82	46	68	47	52	45	44	45	64	72
総計		1052	145	120	104	72	94	68	76	60	63	63	93	94

表5 大阪府におけるホームレス死亡者の年次別救急搬送率

地	野宿・簡宿	2000	2001	2002	2003	2004	総計
市外	野宿	18.8%	7.5%	12.9%	20.0%	20.0%	15.7%
市内	簡宿	9.9%	5.1%	9.4%	17.7%	15.8%	11.3%
	野宿	24.8%	23.1%	28.6%	21.3%	25.3%	24.4%
市内		20.1%	17.6%	21.9%	20.1%	22.2%	20.1%
総計		19.9%	15.9%	20.3%	20.1%	21.7%	19.4%

表6 大阪府におけるホームレス死亡者の死因種類・年齢層別分布

野宿・簡宿	地域	死種	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	総計
簡宿	大阪市内	自己過失	1		1	4	4				10
		自殺	2	5	10	22	22	7			68
		他殺			2						2
		病死		7	15	72	75	27	2		198
		不詳外因				3	2				5
市内 合計			3	12	28	101	103	34	2		283
簡易宿泊所投宿者 合計			3	12	28	101	103	34	2		283
野宿	大阪市外	自己過失			1	15	4	1			21
		自殺		2	2	5	2	1			12
		他殺				6	2				8
		病死	1	3	14	53	42	6	1		120
		不詳			1	5	2	1			9
		不詳外因		1		3	3	1			8
市外 合計			1	6	18	87	55	10	1		178
大阪市内	大阪市内	自己過失		1	11	27	29	8			76
		自殺		3	10	21	8				42
		他殺	1	2	3	9	5	1			21
		病死		4	49	161	153	43	1		411
		不詳		1	1	3	4	2			11
		不詳外因			6	14	8	2			30
市内 合計			1	11	80	235	207	56	1		591
野宿生活者 合計			2	17	98	322	262	66	2		769
総計			5	29	126	423	365	100	4		1052

表7 大阪府におけるホームレス死亡者の死因別分布

死因種類	統計死因	大阪市外		大阪市内		総計
		野宿	簡宿	野宿	合計	
病死		120	198	411	609	729
	心臓死	71	69	100	169	240
	脳死	8	17	44	61	69
	肺臓死	3	25	80	105	108
	病死その他	27	78	141	219	246
	飢餓死	11	4	23	27	38
	その他		5	23	28	28
自己過失		21	10	76	86	107
	凍死	14	3	59	62	76
自殺		12	68	42	110	122
	縊死	11	39	27	66	77
他殺		8	2	21	23	31
不詳外因		8	5	30	35	43
不詳		9		11	11	20
総計		178	283	591	874	1052

表8 大阪府におけるホームレス死亡者の死因ごとの死亡発見月分布

死因の種類および死因	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12					
病死	729	100	83	7	35	1	68	4	75	13	83	9	47	67	65			
	心臓死	240	21	35	2	22	0	25	1	71	21	61	5	16	18	23		
	脳死	69	12	6	7	6	5	6		5	3	4	8	7				
	肺臓死	108	22	9	1	51	1	15	3	4	3	3	5	8	10			
	病死その他	246	39	28	2	31	2	19	1	02	51	11	5	17	25	22		
	飢餓死	38	4	3	4	1	2	6	3	2	1	4	6	2				
	その他	28	2	2	2	1	2	5	7	1	2	1	2	1				
自己過失	107	28	19	1	6	8	3	1	3	5	2	2	5	15				
	凍死	76	24	19	1	2	4	1					5	11				
自殺	122	8	9	1	9	19	1	61	1	61	2	6	8	7				
	縊死	77	7	6	9	6	11	1	5	6	5	4	3	4				
他殺	31	4	4	1	1	1	1	4	4	3	3	3	2					
不詳外因	43	3	4	2	2	1	3	4	5	6	4	7	2					
不詳	20	2	1	1	1	2		3	2	1	1	3	3					
総計	1052	145	120	104	7	2	94	6	8	7	6	6	0	6	3	63	93	94

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

1. 黒田研二「ホームレス者の医療ニーズと医療保障—大阪市における高齢者特別清掃事業従事者健診結果より」大阪保険医雑誌、32巻451号、36頁～40頁、2004年7月
2. 逢坂隆子「大阪社会医療センター入院患者から見える『野宿生活者の生活と健康』」大阪保険医雑誌、32巻451号、41頁～48頁、2004年7月
3. 下内昭「ホームレスと結核—DOTSの経験から」大阪保険医雑誌、32巻451号、49頁～52頁、2004年7月
4. 黒川渡「『おおぞら医療健康相談』から見えてくるもの」大阪保険医雑誌、32巻451号、60頁～65頁、2004年7月